

同値関係と数の構成について

S17M047 下山 晴生

本稿ではこれまで扱ってきた“種々の数”を集合論(写像, 直積集合, 同値関係)に立脚し再構成する.

1 整数 \mathbb{Z} の構成

自然数全体の集合 $\mathbb{N} = \{0, 1, 2, \dots\}$ 上の演算(和・積)及び全順序 \leq は既知とする. 例えば「 \mathbb{N} 内で $a + x = b + x$ が成立すれば, 両辺で共通する x を“消去”して $a = b$ が得られる」こと等は自由に用いる. 直積集合 $\mathbb{N} \times \mathbb{N}$ の元 (m, n) と (x, y) に対して, $(m, n) \sim_{\mathbb{Z}} (x, y) := m + y = n + x$ in \mathbb{N} という関係を考える.

補題 1.1. この $\sim_{\mathbb{Z}}$ は $\mathbb{N} \times \mathbb{N}$ 上の同値関係である.

Proof. [反射律] と [対称律] は明らかである. [推移律] 任意の $(m, n) \sim_{\mathbb{Z}} (x, y)$ と $(x, y) \sim_{\mathbb{Z}} (a, b)$ に対して, $(m + b) + (x + y) = (m + y) + (x + b) = (n + x) + (x + b) = (n + x) + (y + a) = (n + a) + (x + y)$ が定義から成立する. 両辺から $x + y$ を“消去”して $m + b = n + a$ を得る. よって $(m, n) \sim_{\mathbb{Z}} (a, b)$ が成立する. \square

この同値関係による商集合を $\mathbb{Z} := (\mathbb{N} \times \mathbb{N}) / \sim_{\mathbb{Z}}$ と書き, 元を整数という. この集合上に, 二項演算 $+_{\mathbb{Z}}$ 及び $\times_{\mathbb{Z}}$, ゼロ元 $0_{\mathbb{Z}}$, 単位元 $1_{\mathbb{Z}}$, 順序 $\leq_{\mathbb{Z}}$ をそれぞれ次の様に定義する.

$$\begin{aligned} [(m, n)] +_{\mathbb{Z}} [(x, y)] &:= [(m + x, n + y)], & [(m, n)] \times_{\mathbb{Z}} [(x, y)] &:= [(mx + ny, my + nx)], \\ 0_{\mathbb{Z}} &:= [(0, 0)], & 1_{\mathbb{Z}} &:= [(1, 0)], & [(m, n)] \leq_{\mathbb{Z}} [(x, y)] &:= m + y \leq n + x. \end{aligned}$$

補題 1.2. これらの二項関係 $+_{\mathbb{Z}}, \times_{\mathbb{Z}}, \leq_{\mathbb{Z}}$ は well-defined である.

Proof. $+_{\mathbb{Z}}, \leq_{\mathbb{Z}}$ は比較的容易に示せる. $\times_{\mathbb{Z}}$ について] 任意の $(m, n) \sim_{\mathbb{Z}} (m', n')$ と $(x, y) \sim_{\mathbb{Z}} (x', y')$ に対して, 等号 $(m + n')(x + x') + (m + m')(x + y') + (n + m')(x' + y) = (n + m')(x + x') + (m + m')(y + x') + (m + n')(x + y')$ が \mathbb{N} 内で成立する. これを整理し, $(mx + ny) + (m'y' + n'x') = (m'x' + n'y') + (my + nx)$ を得る. 即ち, $(mx + ny, my + nx) \sim_{\mathbb{Z}} (m'x' + n'y', m'y' + n'x')$ である. \square

補題 1.3. 集合 \mathbb{Z} は和 $+_{\mathbb{Z}}$ と積 $\times_{\mathbb{Z}}$ によって可換環をなす. さらに整域になる.

Proof. 演算の定義から \mathbb{Z} が可換環をなすことは比較的容易に従う. 例えば $[(m, n)]$ のマイナス元は $-[(m, n)] = [(n, m)]$ である. 次に整域性をいう. もし $[(m, n)] \times_{\mathbb{Z}} [(x, y)] = 0_{\mathbb{Z}}$ であったとすると, $mx + ny = my + nx$ が成立する. $[(m, n)] \neq 0_{\mathbb{Z}}$, つまり $m \neq n$ の場合, $n \leq m$ 若しくは $m \leq n$ が成立している. 前者の場合, $\exists k \in \mathbb{N}, m = n + k$ と表せるので, $nx + kx + ny = ny + ky + nx$ を得る. 両辺で共通する項を“消去”して $kx = ky$ が成立する. いま $[(m, n)] \neq 0_{\mathbb{Z}}$ だから $k \neq 0$ である. よって \mathbb{N} の性質より $x = y$ を得るので, $[(x, y)] = 0_{\mathbb{Z}}$ である. 後者の場合も同様である. \square

補題 1.4. $\forall M, X \in \mathbb{Z}$ に対して次が成立する. (1) $M \leq_{\mathbb{Z}} X \Leftrightarrow 0_{\mathbb{Z}} \leq_{\mathbb{Z}} X - M$, (2) $0_{\mathbb{Z}} \leq_{\mathbb{Z}} A$ かつ $A \neq 0_{\mathbb{Z}}$ ならば $[0_{\mathbb{Z}} \leq_{\mathbb{Z}} M \Leftrightarrow 0_{\mathbb{Z}} \leq_{\mathbb{Z}} M \times_{\mathbb{Z}} A]$, (3) $0_{\mathbb{Z}} \leq_{\mathbb{Z}} A$ かつ $A \neq 0_{\mathbb{Z}}$ ならば $[M \leq_{\mathbb{Z}} X \Leftrightarrow M \times_{\mathbb{Z}} A \leq_{\mathbb{Z}} X \times_{\mathbb{Z}} A]$.

Proof. (1) は順序の定義から明らかである. (2) 代表元で $M = [(m, n)], A = [(a, b)]$ と表示するとき, 仮定より, ある $k \in \mathbb{N}$ が存在し $a = b + k$ と表せる. (\Rightarrow) 仮定から $n \leq m$ がいえるので, $mb + na = mb + nb + nk \leq mb + nb + mk$ が得られる. 不等式左辺は $m(b + k) + nb = ma + nb$ となるので, $0_{\mathbb{Z}} \leq_{\mathbb{Z}} M \times_{\mathbb{Z}} A$ が成

立する。(⇐) 仮定より $mb + na \leq ma + nb$ がいえるので, $mb + nb + nk \leq mb + mk + nb$ が得られる. 両辺で共通する項を“消去”して, $nk \leq mk$ となる. いま仮定より $A \neq 0_{\mathbb{Z}}$ だから $k \neq 0$ である. よって \mathbb{N} の性質より $n \leq m$ が成立する. (3)(⇒) (1) より, $0_{\mathbb{Z}} \leq_{\mathbb{Z}} X - M$ を得る. $0_{\mathbb{Z}} \leq_{\mathbb{Z}} A$ なので (2) より, $0_{\mathbb{Z}} \leq_{\mathbb{Z}} (X - M) \times_{\mathbb{Z}} A$ がわかる. \mathbb{Z} の分配律より $(X - M) \times_{\mathbb{Z}} A = X \times_{\mathbb{Z}} A - M \times_{\mathbb{Z}} A$ が成り立つので, (1) より $M \times_{\mathbb{Z}} A \leq_{\mathbb{Z}} X \times_{\mathbb{Z}} A$ が成立する. (⇐) 先の議論の逆を迎ればよい. \square

自然な写像 $f: \mathbb{N} \rightarrow \mathbb{Z}; m \mapsto [(m, 0)]$ は二項演算と順序を保つ単射である事がすぐわかる. つまり $\forall m, x \in \mathbb{N}$ に対して, $f(m+x) = f(m) +_{\mathbb{Z}} f(x)$, $f(mx) = f(m) \times_{\mathbb{Z}} f(x)$, $m \leq x \Leftrightarrow f(m) \leq_{\mathbb{Z}} f(x)$ が成立する. この単射による同一視のもと, 以降 $m, n \in \mathbb{N}$ に対して, $+_{\mathbb{Z}}, \times_{\mathbb{Z}}, 0_{\mathbb{Z}}, 1_{\mathbb{Z}}, \leq_{\mathbb{Z}}$ の添字 \mathbb{Z} は省略する.

2 有理数 \mathbb{Q} の構成

以下で $\mathbb{Z}^+ := \{N \in \mathbb{Z} \mid 0 \leq N \text{ かつ } N \neq 0\}$ とおく. 直積集合 $\mathbb{Z} \times \mathbb{Z}^+$ の元 (M, N) と (X, Y) に対して, $(M, N) \sim_{\mathbb{Q}} (X, Y) :\Leftrightarrow MY = NX \text{ in } \mathbb{Z}$ という関係を考える.

補題 2.1. この $\sim_{\mathbb{Q}}$ は $\mathbb{Z} \times \mathbb{Z}^+$ 上の同値関係である.

Proof. [反射律] と [対称律] は明らかである. [推移律] 任意の $(M, N) \sim_{\mathbb{Q}} (X, Y)$ と $(X, Y) \sim_{\mathbb{Q}} (A, B)$ を取り固定する. まず $MY = NX$ の両辺に B を掛けると $MYB = NXB$ を得る. この右辺で $XB = YA$ を用いれば $MYB = NYA$ が成立する. いま $Y \in \mathbb{Z}^+$ であるから, 補題 1.3 より $MB = NA$ を得る. \square

この同値関係による商集合を $\mathbb{Q} := (\mathbb{Z} \times \mathbb{Z}^+) / \sim_{\mathbb{Q}}$ と書き, その元を有理数という. この集合上に, 二項演算 $+_{\mathbb{Q}}$ 及び $\times_{\mathbb{Q}}$, ゼロ元 $0_{\mathbb{Q}}$, 単位元 $1_{\mathbb{Q}}$, 順序 $\leq_{\mathbb{Q}}$ をそれぞれ次の様に定義する.

$$[(M, N)] +_{\mathbb{Q}} [(X, Y)] := [(MY + NX, NY)], \quad [(M, N)] \times_{\mathbb{Q}} [(X, Y)] := [(MX, NY)], \\ 0_{\mathbb{Q}} := [(0, 1)], \quad 1_{\mathbb{Q}} := [(1, 1)], \quad [(M, N)] \leq_{\mathbb{Q}} [(X, Y)] :\Leftrightarrow MY \leq NX.$$

補題 2.2. これらの二項関係 $+_{\mathbb{Q}}, \times_{\mathbb{Q}}, \leq_{\mathbb{Q}}$ は well-defined である.

Proof. $+_{\mathbb{Q}}, \times_{\mathbb{Q}}$ は比較的容易に示せる. [$\leq_{\mathbb{Q}}$ について] 任意の $(M, N) \sim_{\mathbb{Q}} (M', N')$ と $(X, Y) \sim_{\mathbb{Q}} (X', Y')$ に対して, $MN' = NM'$ かつ $XY' = YX'$ が成立している. いま $MY \leq NX$ と仮定すると, 両辺に $N' \in \mathbb{Z}^+$ を掛けることで $MN'Y \leq NN'X$ を得る (補題 1.4(3)). これにより $NM'Y \leq NN'X$ が成立する. ここで $N \in \mathbb{Z}^+$ なので補題 1.4(3) より, $M'Y \leq N'X$ がわかる. この両辺に Y' を掛けて $M'YY' \leq N'XY'$ を得る (補題 1.4(3)). これにより $MYY' \leq N'YX'$ が成立する. いま $Y \in \mathbb{Z}^+$ なので, 補題 1.4(3) より $M'Y' \leq N'X'$ が成立する. \square

上記演算により \mathbb{Q} は体をなすことが容易に示される. 例えば $0_{\mathbb{Q}} \neq [(M, N)] \in \mathbb{Q}$ に対して, その逆元は $[(N, M)]$ で与えられる. 自然な写像 $\mathbb{Z} \rightarrow \mathbb{Q}; M \mapsto [(M, 1)]$ は順序を保つ単射な環準同型である. この同一視のもと, 以降 $(M, N) \in \mathbb{Z} \times \mathbb{Z}^+$ に対して, $\frac{M}{N} := [(M, N)]$ と書き, $+_{\mathbb{Q}}, \times_{\mathbb{Q}}, 0_{\mathbb{Q}}, 1_{\mathbb{Q}}, \leq_{\mathbb{Q}}$ の添字 \mathbb{Q} は省略する. 補題 1.4 から次がすぐわかる.

補題 2.3. $\forall M, X \in \mathbb{Z}, \forall N \in \mathbb{Z}^+$ に対して, $M \leq X \Leftrightarrow \frac{M}{N} \leq \frac{X}{N}$ が成立する.

各 $q \in \mathbb{Q}$ に対して $|q| := q(0 \leq q \text{ のとき}), -q(q \leq 0 \text{ のとき})$ をその絶対値という.

補題 2.4 (三角不等式). $\forall p, q \in \mathbb{Q}$ に対して, (1) $|p+q| \leq |p| + |q|$ かつ (2) $|p| - |q| \leq |p-q|$ が成立する.

Proof. (1) まず p, q が同時に正・負のときは定義より明らか．次に $q \leq 0 \leq p$ のときを考える．(i) $0 \leq p + q$ のとき $|p+q| = p+q \leq p-q = |p|+|q|$ なのでよい．(ii) $p+q \leq 0$ のとき $|p+q| = -p-q \leq p-q = |p|+|q|$ なのでよい．最後に $p \leq 0 \leq q$ のときも同様にして主張が確かめられる．この結果より (2) は容易に従う．□

簡単な為, $p, q \in \mathbb{Q}$ に対して $p < q \Leftrightarrow p \leq q$ かつ $p \neq q$ と定義し, $\mathbb{Q}^+ := \{q \in \mathbb{Q} \mid 0 < q\}$ と書く．

補題 2.5. (1) $\forall q, p \in \mathbb{Q}$ に対して $[q < p \Rightarrow \exists r \in \mathbb{Q}, q < r < p]$ が成立する．(2) $\forall q \in \mathbb{Q}$ に対して $[\forall p \in \mathbb{Q}^+, q < p \Rightarrow q \leq 0]$ が成立する．(3) $\forall q \in \mathbb{Q}$ に対して $[\forall p \in \mathbb{Q}^+, |q| < p \Rightarrow q = 0]$ が成立する．

Proof. (1) 仮定から $2q = q + q < q + p$ が成り立つので, 補題 2.3 より $q = \frac{2q}{2} < \frac{q+p}{2}$ を得る．また仮定から $q + p < p + p = 2p$ が成り立つから同様にして $\frac{q+p}{2} < \frac{2p}{2} = p$ を得る．よって $r := \frac{q+p}{2}$ とおけば主張が成立する．(2) 背理法で $0 < q$ と仮定すると, (1) から $\exists r \in \mathbb{Q}$ s.t. $0 < r < q$ となる．すると $r \in \mathbb{Q}^+$ となるが, これは前提に矛盾する．(3) まず $q \leq |q|$ と (2) から $q \leq |q| \leq 0$ が成立している．一方で $-q \leq |q|$ と (2) から $-q \leq |q| \leq 0$ であるから, $0 \leq q$ となる．従って $q = 0$ を強いる．□

3 実数 \mathbb{R} の構成

写像 $a : \mathbb{N} \rightarrow \mathbb{Q}$ を有理数列という．このとき各 $n \in \mathbb{N}$ に対して $a_n := a(n)$ と書き, 写像 a を $(a_n)_n$ と表すことにする．また $q \in \mathbb{Q}$ に対して, $(q)_n$ を $\mathbb{N} \rightarrow \mathbb{Q}; n \mapsto q$ という“恒等的に同じ値を取る数列”とする．

定義 3.1. 有理数列 $(a_n)_n$ が **Cauchy** であるとは $\forall \epsilon \in \mathbb{Q}^+, \exists k \in \mathbb{N}, \forall m, n \in \mathbb{N} [m, n > k \Rightarrow |a_m - a_n| < \epsilon]$ が成立するときをいう．その全体の集合を $\mathbb{Q}_C^{\mathbb{N}}$ と書く．

命題 3.2. 任意の $(a_n)_n \in \mathbb{Q}_C^{\mathbb{N}}$ は \mathbb{Q} の中で有界である．つまり $\exists q \in \mathbb{Q}^+, \forall n \in \mathbb{N}, |a_n| < q$ が成立する．

Proof. 定義から $\exists k \in \mathbb{N}, \forall m \in \mathbb{N} [m > k \Rightarrow |a_m - a_{k+1}| < 1]$ が成立しているので, 補題 2.4(2) より $m > k$ に対して, $|a_m| - |a_{k+1}| \leq |a_m - a_{k+1}| < 1$ を得る．そこで主張の q として $\max\{|a_0|, |a_1|, \dots, |a_k|, |a_{k+1}| + 1\}$ をとればよい．ここで \mathbb{Q} の順序は全順序なので最大値が存在することに注意する．□

さて $(a_n)_n, (b_n)_n \in \mathbb{Q}_C^{\mathbb{N}}$ に対して, 二項関係 $(a_n)_n \sim_{\mathbb{R}} (b_n)_n$ を $\forall \epsilon \in \mathbb{Q}^+, \exists k \in \mathbb{N}, \forall m, n \in \mathbb{N} [m, n > k \Rightarrow |a_m - b_n| < \epsilon]$ と定義する．

補題 3.3. この $\sim_{\mathbb{R}}$ は $\mathbb{Q}_C^{\mathbb{N}}$ 上の同値関係である．

Proof. [反射律] $\mathbb{Q}_C^{\mathbb{N}}$ の定義より明らか．[対称律] 絶対値の定義より明らか．[推移律] $(a_n)_n \sim_{\mathbb{R}} (b_n)_n$ かつ $(b_n)_n \sim_{\mathbb{R}} (c_n)_n$ とする． $\forall \epsilon \in \mathbb{Q}^+$ をとり固定する．定義より $\exists k, k' \in \mathbb{N}, \forall m, n \in \mathbb{N} [m, n > k \Rightarrow |a_m - b_n| < \frac{\epsilon}{3}]$ かつ $[m, n > k' \Rightarrow |b_m - c_n| < \frac{\epsilon}{3}]$ であり, $(b_n)_n \in \mathbb{Q}_C^{\mathbb{N}}$ より, $\exists k'' \in \mathbb{N} [m, n > k'' \Rightarrow |b_m - b_n| < \frac{\epsilon}{3}]$ である．よって $m, n > \max\{k, k', k''\}$ のとき補題 2.4 より, $|a_m - c_n| = |a_m - b_n + b_m - c_n + b_m - b_n| \leq |a_m - b_n| + |b_m - c_n| + |b_n - b_m| < \frac{\epsilon}{3} + \frac{\epsilon}{3} + \frac{\epsilon}{3} = \epsilon$ と評価できる．従って $(a_n)_n \sim_{\mathbb{R}} (c_n)_n$ が示された．□

この同値関係による商集合を $\mathbb{R} := \mathbb{Q}_C^{\mathbb{N}} / \sim_{\mathbb{R}}$ と書き, その元を実数という．この集合上に, 二項演算 $+_{\mathbb{R}}$ 及び $\times_{\mathbb{R}}$, ゼロ元 $0_{\mathbb{R}}$, 単位元 $1_{\mathbb{R}}$, 順序 $\leq_{\mathbb{R}}$ をそれぞれ次の様に定義する．

$$[(a_n)_n] +_{\mathbb{R}} [(b_n)_n] := [(a_n + b_n)_n], \quad [(a_n)_n] \times_{\mathbb{R}} [(b_n)_n] := [(a_n b_n)_n], \quad 0_{\mathbb{R}} := (0)_n, \quad 1_{\mathbb{R}} := (1)_n,$$

$$[(a_n)_n] \leq_{\mathbb{R}} [(b_n)_n] := \Leftrightarrow \forall \epsilon \in \mathbb{Q}^+, \exists k \in \mathbb{N}, \forall n \in \mathbb{N} [n > k \Rightarrow a_n - b_n \leq \epsilon].$$

補題 3.4. これらの二項関係 $+_{\mathbb{R}}, \times_{\mathbb{R}}, \leq_{\mathbb{R}}$ は well-defined である .

Proof. 以下で $(a_n)_n \sim_{\mathbb{R}} (a'_n)_n$ と $(b_n)_n \sim_{\mathbb{R}} (b'_n)_n$ と仮定し, $\forall \epsilon \in \mathbb{Q}^+$ をとり固定する . $[+_{\mathbb{R}}$ について] $\mathbb{Q}_C^{\mathbb{N}}$ の定義より, $\exists k, k' \in \mathbb{N}, \forall m, n \in \mathbb{N} [m, n > k \Rightarrow |a_m - a'_m| < \frac{\epsilon}{2}]$ かつ $[m, n > k' \Rightarrow |b_m - b'_m| < \frac{\epsilon}{2}]$ が成立する . $m, n > \max\{k, k'\}$ とすると $|(a_m + b_m) - (a'_m + b'_m)| = |(a_m - a'_m) + (b_m - b'_m)| \leq |a_m - a'_m| + |b_m - b'_m| < \frac{\epsilon}{2} + \frac{\epsilon}{2} = \epsilon$. よって $(a_n + b_n)_n \sim_{\mathbb{R}} (a'_n + b'_n)_n$. $[\times_{\mathbb{R}}$ について] $(b_n)_n, (a'_n)_n \in \mathbb{Q}_C^{\mathbb{N}}$ であるから, 命題 3.2 より, $q, q' \in \mathbb{Q}^+$ が存在し, $\forall n \in \mathbb{N}$ に対して $|b_n| < q$ と $|a'_n| < q'$ が成立する . また $\mathbb{Q}_C^{\mathbb{N}}$ の定義より, $\exists k, k' \in \mathbb{N}, \forall m, n \in \mathbb{N} [m, n > k \Rightarrow |a_m - a'_m| < \frac{\epsilon}{2q}]$ かつ $[m, n > k' \Rightarrow |b_m - b'_m| < \frac{\epsilon}{2q'}]$ が成立する . よって $m, n > \max\{k, k'\}$ とすると $|a_m b_m - a'_m b'_m| = |(a_m - a'_m)b_m + a'_m(b_m - b'_m)| \leq |a_m - a'_m||b_m| + |a'_m||b_m - b'_m| < \frac{\epsilon}{2q}q + q' \frac{\epsilon}{2q'} = \epsilon$. よって $(a_n b_n)_n \sim_{\mathbb{R}} (a'_n b'_n)_n$. $[\leq_{\mathbb{R}}$ について] $\mathbb{Q}_C^{\mathbb{N}}$ の定義より, $\exists k, k' \in \mathbb{N}, \forall m, n \in \mathbb{N} [m, n > k \Rightarrow |a_n - a'_m| < \frac{\epsilon}{3}]$ かつ $[m, n > k' \Rightarrow |b_n - b'_m| < \frac{\epsilon}{3}]$ が成立する . ここで $\exists k'' \in \mathbb{N}, \forall n \in \mathbb{N} [n > k'' \Rightarrow a_n - b_n < \frac{\epsilon}{3}]$ と仮定すると, $m, n > \max\{k, k', k''\}$ のとき, $a'_m - b'_m = (a'_m - a_n) + (a_n - b_n) + (b_n - b'_m) < \frac{\epsilon}{3} + \frac{\epsilon}{3} + \frac{\epsilon}{3} = \epsilon$. \square

定理 3.5. 上記演算により \mathbb{R} は体をなす .

Proof. 可換環をなすことは明らか . 任意の $0_{\mathbb{R}} \neq [(a_n)_n] \in \mathbb{R}$ が逆元を持つことを示す . $(a_n)_n \in \mathbb{Q}_C^{\mathbb{N}}$ より, (A) $\exists \epsilon \in \mathbb{Q}^+, \forall k \in \mathbb{N}, \exists n \in \mathbb{N} [n > k$ かつ $|a_n| \geq \epsilon]$ が成り立つ . 他方で $(a_n)_n \in \mathbb{Q}_C^{\mathbb{N}}$ より, この ϵ に対して (B) $\exists k_0 \in \mathbb{N}, \forall m, n \in \mathbb{N} [m, n > k_0 \Rightarrow a_m - \frac{\epsilon}{2} < a_n < a_m + \frac{\epsilon}{2}]$ が成り立つ . すると (A) で $k = k_0$ のときを考えると, $\exists n_0 > k_0$ [(i) $a_{n_0} \leq -\epsilon$ または (ii) $\epsilon \leq a_{n_0}$] をとることが出来る . いま $n_0 > k_0$ なので (B) より, $\forall n > k_0, a_n < a_{n_0} + \frac{\epsilon}{2}$ が成立する . このことから (i) $a_{n_0} \leq -\epsilon$ のとき $a_n < a_{n_0} + \frac{\epsilon}{2} \leq -\epsilon + \frac{\epsilon}{2} = -\frac{\epsilon}{2} < 0$ となり, (ii) $\epsilon \leq a_{n_0}$ のとき $a_n > a_{n_0} - \frac{\epsilon}{2} \geq \epsilon - \frac{\epsilon}{2} = \frac{\epsilon}{2} > 0$ となる . よっていずれの場合も $\forall n > k_0, a_n \neq 0$ とわかる . ここで b_n を $n \leq k_0$ のとき 1 とし, $n > k_0$ のとき $\frac{1}{a_n}$ と定める . すると $n > k_0$ ならば $|a_n b_n - 1| = 0 < \epsilon$ より, $(a_n b_n)_n \sim_{\mathbb{R}} (1)_n$ が成立する . \square

定理 3.6. 自然な写像 $\mathbb{Q} \rightarrow \mathbb{R}; q \mapsto [(q)_n]$ は順序を保存する単射な環準同型である .

Proof. まず $[(q)_n] = [(p)_n]$ とすると, $\forall \epsilon \in \mathbb{Q}^+$ に対して, $|q - p| < \epsilon$ となる . すると補題 2.5(3) より $q - p = 0$ となり単射性が示せた . 環準同型であることは定義より明らか . 最後に順序を保つことを示す . まず $q \leq p$ と仮定すると, 任意の $\epsilon \in \mathbb{Q}^+$ に対して $q - p \leq 0 < \epsilon$ が成り立つので $[(q)_n] \leq_{\mathbb{R}} [(p)_n]$ が成り立つ . 逆に $[(q)_n] \leq_{\mathbb{R}} [(p)_n]$ と仮定すると, 任意の $\epsilon \in \mathbb{Q}^+$ に対して $q - p \leq \epsilon$ が成り立つ . よって補題 2.5(2) より, $q - p \leq 0$ が成立し $q \leq p$ を得る . \square

実はこの \mathbb{R} の順序 $\leq_{\mathbb{R}}$ は全順序であることがわかるので [1, 命題 3.2.6], 体 $\mathbb{R} = (\mathbb{R}, 0_{\mathbb{R}}, 1_{\mathbb{R}}, +_{\mathbb{R}}, \times_{\mathbb{R}}, \leq_{\mathbb{R}})$ は順序体となる . 命題 3.2 から「 $\forall \alpha \in \mathbb{R}, \exists n \in \mathbb{N}, \alpha <_{\mathbb{R}} n$ (アルキメデスの原理)」が容易に従う . 実は「 \mathbb{R} の任意の Cauchy 列は “収束列” である (完備性)」が成り立つことが知られている [1, 定理 3.2.7] ので, 特に「 \mathbb{R} の任意の空でない上に有界な集合は “上限” を持つ (連続性公理)」も成り立つ [2, 第 1 章 §3 注意 4] . 事実として, このような性質を持つような順序体は, 体の同型を除いて一意的に存在する [1, 定理 3.1.8] ことから, これまで当たり前のように扱ってきた “実数” を, 本稿では集合論の立場から具体的に構成したことになる .

参考文献

- [1] 齋藤 正彦 (著), 『数学の基礎 集合・数・位相』, 東京大学出版会, 2002 年
- [2] 杉浦 光夫 (著), 『解析入門 I』, 東京大学出版会, 1980 年
- [3] 坪井 明人, 塩谷 真弘, 佐垣 大輔 (共著), 『集合入門』, 牧野書店, 2019 年